

コーナー展「武家の諸道具」

3月12日～5月6日

江戸時代政治の中樞（ちゅうすう）を担っていたのは武士身分（武家）でした。ただ武士と一口に言っても上は将軍・大名から下は足軽・浪人まであり、その暮らしぶりは大きな差がありました。今回のコーナー展では一般藩士の事例を中心に「衣」「食」「住」に分けて紹介します。

武家の諸道具「衣」

武士の服装は身分格式によって細かく決められており、通常の場合は袴(かみしも)を着用し、大小の刀を差して登城しました。

自宅では小袖(こそで)に袴(はかま)、あるいは小袖の着流(きなが)しになり、時にはその上に羽織(はおり)を着ました。

武士は戦さの際には甲冑(かっちゅう)を付けて、戦場に赴(おもむ)きましたが、泰平の世が続くと甲冑を売却・質入れする者も多く、甲冑の着方を忘れて、知らない武士も少なくありませんでした。そうした武士に向けて甲冑の着方を記したマニュアルも出版されました。



甲冑（手前）と袴（奥）

この甲冑は当世具足（とうせいぐそく）と呼ばれる種類の甲冑で、脛（すね）から頭まで身体全体を隈なくおおっている甲冑です。武士の通常の登城着の袴は肩衣と袴からなり、胸や背中・腰に家紋が付けられています。

打刀（うちがたな）

上が打刀（刃を上にして帯に差す刀）で下が脇差です。武士は外出時、大小2本の刀を差していました。泰平の世になると武器である刀にも装飾が施されるようになってきました。



『甲冑着用弁』上下

甲冑の着方を記した本で、着方の順番の他、部分名称や役割、持参する武器や戦場での注意等が記されています。

武家の諸道具～食～

江戸時代の食生活は当初、1日2食でしたが、元禄期（1688～1704）頃から3食の習慣が広まりました。武士は朝夕の食事を自宅でとり、昼は弁当を持参して、城内の部署でとりました。

この時代の人々は、飯椀や汁椀等を乗せた各自の膳（ぜん）で食事をしました。大名等の食器はそれぞれ家紋が付けられた豪華な塗物でしたが、一般の武士は粗末な食器を用いました。

武士の家計は概して厳しく、食費はかなり切り詰められていました。祝い事や付き合い等の特別な場合は別として、通常の食事は大変質素で将軍や大名といえども例外ではなく、1汁2～3菜が一般的でした。

久世氏家紋入り膳

関宿藩主の久世家より拝領した膳で、旧二川村の名主宅に伝わるものです。大名の膳具には全て家紋が付けられており、本資料にも久世家の家紋「並び鷹の羽」が付けられています。



蓋付き汁物椀

関宿藩士が使用したと思われる汁椀です。祝い事の際に使われたものと思われます。



関宿城跡発掘品

関宿城跡で発掘されたもので、関宿藩士が使用していたと思われる食器等です。

武家の諸道具～住～

武士の住まいは、身分や禄高等により大きな違いがありました。将軍や大名は、城内の御殿(ごてん)を私的な生活空間である「奥」と、政務を行う「表」に分けて生活しました。藩士は城の周りに土地を与えられ、屋敷を建てて住みました。一般的には本丸に近い場所に、重臣の広い屋敷が配置されました。

物を生産する場所ではない武士宅では、質素な生活を送っていたので、家具も多くありませんでした。中には苦しい生活のため、宅地内に畑を耕して自身で食べるための野菜を作ったり、副業を行う中・下級武士宅もあり、そのための諸道具も置かれていました。



書見台

武士が読書をする際、書物を置くためのものです。ここにも家紋が付けられています。



刀掛け

左の刀掛けは大小2本の刀を置くもので、右の刀掛けは太刀（たち 刃を下にして吊り下げて着用する刀）を立てて置くものです。武士も家でくつろぐ際は刀を外していました。

